

氏名	鹿倉 由衣
ヨミガナ	シカクラ ユイ
学位の種類	博士（学術）
学位記番号	博音第277号
学位授与年月日	平成28年3月25日
学位論文等題目	〈論文〉 幼児の文化学習としての日本音楽の経験の意義 —長唄ワークショップの実践を通して—

論文等審査委員

(主査)	東京藝術大学	教授	(音楽学部)	佐野 靖
(副査)	東京藝術大学	教授	(音楽学部)	山下 薫子
(副査)	東京藝術大学	教授	(音楽学部)	塚原 康子
(副査)	東京藝術大学	教授	(音楽学部)	杉本 和寛
(副査)	聖心女子大学	准教授		今川 恭子

(論文内容の要旨)

本研究の目的は、日本音楽の稽古のワークショップを通して、子どもの文化学習としての日本音楽の経験の意義を提示することである。

本研究の対象と方法は以下の通りである。①これまでの長唄の稽古の歴史および全盛期の長唄の稽古の様子について、文献による調査と経験者を対象とした聞き取り調査によって分析し、稽古の内容や特徴などに学習科学の観点から考察する。②幼児を対象とした長唄のワークショップを開発する。ワークショップの素材として用いた楽曲の特徴を発展の経緯や曲の背景とともに整理する。伝統的な長唄の稽古の特徴と幼児期の学習の発達の特性を踏まえて指導方略の観点を導き出し、詳細な計画をおこなう。③実践のなかでの子どもの姿を、指導方略の観点にそって分析する。これらを通して子どもの文化学習における日本音楽の経験の意義を考察した。

日本音楽の稽古の特徴を分析するため、本論ではワークショップの素材に用いた長唄の稽古の歴史を踏まえて考察をした。そのなかで、長唄の稽古に求められたもの、社会的な側面も含めた稽古の仕組みが、子どもの学習の発達の特性と非常に密接に関わっていることが明らかになった。

長唄を始めとする歌舞伎音楽は、その誕生直後からプロフェッショナルとして演奏活動を行うことが可能であったのは男性のみであり、長らく女性は稽古場の運営を行う師匠として従事することが定石とされていた。子どもや素人に手ほどきを行うのは、女性の師匠の役割であり、男性の演奏家が稽古をつける相手は、プロフェッショナルとなることを目指す弟子のみであって、手ほどきの段階に着手することはなかった。多くの演奏家の芸談のなかで記述される稽古は、こうした男性演奏家によるものであり、手ほどきを行う師匠の稽古の詳細な記録は残されていない。しかし、教養として広まり認知されるに至った背景には、歌舞伎公演や演奏活動の中心から離れた、街の師匠の存在が伝承において重要であったことは明らかである。

聞き取り調査を通して分析した女性の師匠による子どもを対象とした手ほどきの稽古の特徴は、①稽古を行う時間や稽古場が子どもたちの生活に密着したかたちである、②一回の稽古は短いフレーズである、③師匠の示す手本をひたすら模倣を繰り返すことによって学ぶ、④学習者が自ら課題を設定することの4点とした。これらは、日本音楽の学習全般に見られる特徴である。幼児期の学習の発達の特性と照らし合わせて、指導方略の観点に以下の4点を導き出した。

- ① 子どもの生活と密着した稽古の設定
- ② 一回の稽古は短いフレーズ
- ③ 憧れの対象の模倣を繰り返すことによる学び

#### ④ 学習者が自ら課題を設定する

本論においては、文化を意味の体系として捉えることとした。文化特有の意味の理解を獲得する体験として、日本音楽を学ぶことを位置付けることができる。日本人であるから日本音楽を学ぶことが重要であるということを超えて、日本の中で培われてきた言語、音に対する感覚的理解そのものを体験することに意義を見出すものである。そしてこれは日本音楽であるとか、祝祷曲であるといった認識を持って取り組むことを必須としていない。子どもたちは、師匠の手本を聴き、それを「善いもの」として認めることで憧れの対象を模倣する稽古の段階に入ってくる。促されるでもなく自分が脱いだ靴を揃える、正座をするなど稽古をする空間を整える子どもたち。彼らは、師匠の手本と対峙した際に、その全体像のもつ「場の相応しさ」を察知して、それに向かって周囲を整えようと動いたのである。手本の模倣を繰り返すうちに、「わざ」の詳細を掴み取る過程には、自らの身体についてのイメージや、物語も含めた師匠の手本の世界観を想像することが強く作用している。師匠の全体像と詳細とを往還的に見ることで、自分なりの「とうとうたらしらしさ」に行き着くのである。そして、そのイメージの言語化を通して他者と共有、共同することでより表現を洗練させる過程へと入る。これらすべては日本音楽の稽古に含まれた学びである。相手と自分のイメージを重ね合わせること、実際に声を出すことなどを通して子どもが確立する「わざ」に、表現の育ちの可能性を見ることが出来る。それは、あくまで実践の時点では検証が困難なことであるが、「わざ」の獲得の過程に含まれる数多くの学びは、子どもの意味世界の構築にとって意義深い経験であろうことは想像に難くない。稽古の体験を通して、子どもの中に文化的な豊かさの広がりをもたらすことが、幼児期に日本音楽を学習することの意義であると本論では結論づける。

#### (総合審査結果の要旨)

申請者の研究は、伝統的な長唄の稽古の特徴を取り入れた日本音楽のワークショップを通して、幼児期において日本音楽の稽古を経験することの意義を示すことを目的としている。伝統的な長唄の稽古を体験する過程で子どもが何を学ぶのかを明らかにするために、長唄三味線の演奏家でもある申請者がプログラムの開発、実践の指導を行い、その事例分析に基づいて考察を深めている。

第1章では、文献調査から長唄の稽古の歴史をたどり、経験者を対象とした聞き取り調査から当時の子どもの稽古の特徴を明らかにした。第2章では、そうした稽古の特徴と幼児期の学習の発達の特性をふまえて、ワークショップ開発のための指導方略の観点を導き出し、《三番叟》の「とうとうたらしらしら」の一節を素材とした長唄ワークショップを構想した。第3章では、うた声の音響解析と、子どもの様子の記述およびその質的分析という2つの側面から事例の分析と考察を行い、長唄ワークショップの開発・構想において指導方略の重要な観点となった4つのポイントに即して、日本音楽の稽古がもたらす学びについて考察した。終章では、長唄の稽古の体験を通して子どもの中に文化的な豊かさの広がりをもたらされるとし、それが幼児期に日本音楽を学習することの意義であると結論づけた。

本研究の評価できる点は、幼児期における日本音楽の学習の意義や指導法に関する先行研究がきわめて少ない中で、独創的なワークショップを自ら構想・実践し、できるだけ実証的に論じるために、詳細な事例分析に取り組んだ点である。申請者自身が長唄奏者であるという特長を生かした実践研究であり、幼児の学習と発達の特性をふまえた指導方略の提案、子どもの学びの姿のとらえは大変興味深く、説得力がある。また、音響解析という新たな方法論の採用については、まだ不十分な点があることは確かであるが、子どもの声の変化のエビデンスを求めた意欲的な試みとして一定の評価はできる。さらに、日本音楽の稽古に含まれた学びと幼児の学びの重なりを実証し、このような文化学習の場を提供することの重要性と有効性を示した本研究の成果は、音楽教育学研究のみならず、保育の研究分野等にも貴重な一石を投じる可能性がある。

本論文は、調査や分析の方法、用語の整理や文章表現などに若干課題を残すものの、学術的に意義あるテーマに独創的に切り込んだ労作であり、博士学位論文としての水準に達していると判断し、合格とする。